

参考資料

函館のロシア人墓地に眠る人々 (19世紀半ばから20世紀前半)

倉田有佳

・はじめに

墓地から函館とロシアの交流を探る。函館で生涯を終えたロシア人を通して函館とロシアの交流を描く。函館とロシアの交流は1793年アダム・ラクスマンの函館来航に始まるが、ロシア人が最初に埋葬されたのは、ロシア領事館開設の翌年(1859年6月)。

記憶や先行研究の蓄積をしっかりと受け継ぎながら、アップデートが必要。

今回の基本文献：

- ・馬場脩『函館外人墓地』図書裡会、1975年。
- ・倉田有佳「函館ロシア人墓地—墓碑のないロシア人をめぐって」『函館日ロ交流史研究会会報』No. 39 (2018年)、2 - 11頁。

0. 函館外国人墓地 (船見町)

■戦中戦後の外国人墓地～函館市立船見中学校生徒会による外国人墓地清掃

第二次世界大戦中は、外国人墓地は荒れ放題で、戦争直後は特定宗教禁止などで、函館市も手を入れかねていた。これが1956年以降、ロシア人墓地に近い船見中学校の生徒会が校外活動として毎週当番制で清掃し、特に彼岸(春)とお盆(秋)には、全員で清掃するようになった¹。

1959年7月3日にフェドレンコ駐日ソ連大使が船見中学校を訪問し、ソ連の子供たちが寄付金として集めた金で購入したという三冊のアルバムが生徒への感謝の印として贈られた²。1961年9月10日には駐日米国大使ライシャワーも訪れ、船見中学校生徒の墓地清掃に謝意が表された。

1. ロシア人墓地

■歴史的経緯：ロシア人墓地、ハリストス正教会墓地

明治3(1870)年にロシア人墓地(グリーキ チャーチ墓地)が墓地として許可され、主として外国人の信徒を埋葬することになり、明治8(1875)年にハリストス正教会墓地が主として邦人信徒(日本人信徒)を埋葬することになった³。日本人男性との結婚により日本国籍者となったロシア人女性(正教徒)は、夫と共に「ハリストス正教会墓地」に眠る。



ロシア人墓地



ハリストス正教会墓地

¹ 元木省吾『函館郷土史話』函館郷土史研究会、1965年、113頁。

² 学校長石本義一「21世紀を考える」『ふなみ』第1号(1960年)、函館市立船見中学校生徒会、2 - 3頁。

³ 明治8年9月18日「外国人墓地貸渡証書」『墓地関係書類』所収、函館正教会作成。函館市中央図書館蔵。

■墓地の管理者（戦前）

- ・昭和10（1935）年、国有地（未開地）だった外国人墓地の土地が市に無償で移管（付与）⁴。事前に拓殖省から函館市長に対し、「一応現在の管理者に異存の有無や希望条件等があれば調査するよう」文書が届き、ギリキチャーチ墓地管理者のハリストス正教会は長司祭白岩徳太郎名で、「これまで通り無償で貸付されるものであると受け止め、移管に異存はない」、と市長に回答⁵。
- ・ロシア人墓地は露国領事館が当たっていたが、昭和11（1936）年以後は函館市が直接管理することになった⁶。

■現存する墓石は「43基」、をアップデート

・失われた墓碑

ロシア人墓地には「合わせて43基が現存」が定説⁷。しかし、開港100年を迎えたことに合わせて1958年10月25日に実施された函館のロシア人墓地調査の際には、ロシア人墓地の管理者である函館ハリストス正教会の近藤昇太郎神父から「66にのぼる墓の説明」があった⁸。

菅原繁昭は「失われた墓碑銘—函館のロシア人墓地」⁹の中で、昭和24（1949）年3月28日付で大蔵省管理局長の照会に対する調査・回答として函館のハリストス正教会が提出した「連合国人墓地調」（『墓地関係書類』所収）を基に地元紙で補完した結果、墓碑のない（墓石がない）ロシア人が12名いたことを明らかにした。

以下の表の20名は、倉田が「連合国人墓地調」に正教会のメトリカ（信徒名簿）（*）と地元紙（『函館新聞』、『函館毎日新聞』、『函館日日新聞』）の情報を加えて作成したもの。12名以外にNo.の前に※印を付した8名が新たに判明。

（*）使用した戦前のメトリカ（コピー）は、函館日ロ交流史研究会の活動目的を理解し、松平神父（司祭アレキセイ松平康博・故人）が提供してくださったもの。研究目的を越えぬよう配慮した。

表 函館ロシア人墓地に眠る墓碑のないロシア人

No.	死亡者名	性別	死亡日	死因など
1	シメオン・シソツエフ	男	1911. 7/28	・豊川病院入院治療中に永眠。 ・咽頭結核 肺結核。7/29 ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者：伝教者パウル松木 歌唱教師イサアク増田。
2	ニコライ・アントノウイチ・キム (62歳)	男	1914. 9/9	・9月24日午前2時、デンビー商会の傭船露国義勇艦隊「ヤナ号」がペトロパヴロフスクから船客223名、塩鮭を搭載し入港。航海中朝鮮人1名が病死（『函館新聞』1914. 9/23 夕刊、『函館新聞』9/24）。 ・9/24 ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩と読経者パウエル松木。
3	グリゴリイ・ユルデエフ・ストロユーク (31歳)	男	1914. 10/20	・カムチャツカのデンビー商会漁場から入港して来た義勇艦隊「ネージニ・ノヴゴロド号」の乗組漁夫カロホール（30歳、露暦1883年1月25日生）。函館上陸後、各所のハウスでウイスキーやビールや焼酎をしたたか飲み、いざ本船に帰ろうと税関前まで来たが、どこが船やら海やら見分けもつかず、そのまま海中に転落し溺死。翌朝発見され、函館水上警察署の菊池部長が検視した後、死体はデンビー商会に引渡された（『函館新聞』1914. 10/20）。 ・カロホール（30歳）と判明した死体は、露国領事に引渡した（『函館毎日新聞』1915. 10/21）。 ・「連合国人墓地調」に「グリゴリイ・ストロユーク」の名で記載有り。 ・ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩と読経者パウエル松木。

⁴ 『自昭和10年4月至昭和11年3月 函館市議会議決書（昭和11年度各市予算ハ除ク）』函館市役所、36 - 37頁。

⁵ 「外国人墓地処理ニ関スル件」『墓地関係書類』所収。

⁶ 馬場脩「函館外人墓地 外人実業家四天王の末路と秘密結社・解剖」『はこだて』（市立函館博物館館長石川政治編）第1巻第2号、1975年、53 - 54頁。

⁷ 馬場脩『函館外人墓地』図書裡会、1975年、79頁。

⁸ 『北海道新聞』1958年10月26日。

⁹ 菅原繁昭「失われた墓碑銘—函館のロシア人墓地」『函館日ロ交流史研究会会報』No.27号、2004年、10 - 12頁。

4	エフイミヤ・ホフロワ (46歳)	女	1915. 7/27	<ul style="list-style-type: none"> ・カムチャツカからウラジオストクに引揚げる途中、露国人漁夫220名、鮭缶、メ粕、筋子搭載した露国義勇艦隊「エニセイ号」が函館に入港（『函館新聞』1915. 7/27 夕刊）。 ・7月26日午後3時入港。23歳位の頗る美人。本人はカムチャツカ出帆の際より、なんとなく元気すぐれなかったが、同日午前10時死亡。入港と共に警察医の検視を受け、死因は肺結核と判明。死体は同船で引取り、塩漬にしてウラジオ方面へ赴くだろう（『函館新聞』1915. 7/27）。 ・<u>アストラハン州チェルノヤスキイ県ヴァゾフスキイ郡ヴァゾフスキイ村出身。46歳。海上航行中、船室で7月23(?)日死亡。46歳。ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩と読経者パウエル松木。</u>
※5	トウストラヒナ (25歳)	女	1916. 10/11	<ul style="list-style-type: none"> ・11日午後11時、カムチャツカから引揚げて来た露国義勇艦隊に乗り込んだ上級船員某の妻。頗る美人。出漁中は夫の傍らを離れずと、常に同船していたが、数日前から風邪をこじらせ肺炎を起こし、遂に死亡。入港後、水上署へ死亡を届出した（『函館新聞』1916. 10/12 夕刊）。
6	エリセイ・デミヤノヴィチ・セズィコ (39歳)	男	1916. 10/? (メトリカに日付の記載無し)	<ul style="list-style-type: none"> ・露国義勇艦隊汽船「トボリスク号」に乗船したロシア人漁夫たちが上陸後ウオッカで泥酔。税関前でアルコールの奪い合いから口論。仲裁に入ったセズィコが刺され大怪我を負ったため函館病院へ運ばれ大手術を受けるが死亡（『函館日日新聞』1916. 10/13；『函館新聞』1916. 10/13、10/14）。 ・加害者について、『函館新聞』1916. 10/13には「ボウチーフ」、『函館日日新聞』1916. 10/14には「ワシリー・ニコラエヴィチ・トドチーフ (25歳) は函館監獄出張所に投ぜられた」と記載。 ・10/17ロシア人墓地に埋葬。葬儀執行者は司祭モイセイ白岩と読経者パウエル松木。
※7	ピョートル・クズミチ・チグレヤノフ (25歳位)	男	1918. 5/30	<ul style="list-style-type: none"> ・リューリ商会帆船「久吉丸」に乗込んだ漁夫。函館港内に碇泊中、船内にて軍用銃で頭部を撃ち自殺。日頃から飲酒に身を持ち崩し、同日も午前4時から仲間とアルコールをあおっていたが、妻アーサーエワ・ペシクルワ (22歳) と夫婦げんかし、離縁を迫られたため自殺を図った模様。死体はリューリ商会が引取り、火葬に附した（『函館日日新聞』1918. 6/1）。 ・6/2ロシア人墓地に埋葬。自殺者のため埋葬祈祷は執行せず、立ち合いのみ。
8	ウラジーミル・オリソフ[ヴォリーソフ] (42歳)	男	1918. 11/10	<ul style="list-style-type: none"> 肺炎のため豊川病院で死亡。 11/12ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩と読経者パウエル松木。
9	アンナ・シトレヴナ・ジェルトビナ (45歳)	女	1918. 11/10	<ul style="list-style-type: none"> 露国汽船「オレグ号」で病死。 11/12ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩と読経者パウエル松木。
※10	ヨセフ (28歳)	男	1918. 11/19	<ul style="list-style-type: none"> ・11月19日ウラジオストクから入港した露国義勇艦隊「トムスク号」乗組漁夫。同艦船内の鉄柵に細ロープを掛け縊死した、と水上署に届け出があったため、警察医が検視。しかし、原因は不明（『函館日日新聞』1918. 11/20）。
11	ワシリー・エロフェーヴィチ・コトフ (19歳)	男	1918. 11/20	<ul style="list-style-type: none"> <u>沿海州イマン郡マリヤノフスキイ市字ベレゾフスキイ出身。露国義勇艦隊「トムスク号」の水兵、同船で病死。</u> 11/21ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩。
12	フョードル・ワーロフ (48歳)	男	1919. 9/24	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>ヴェトカヤ州カテリチ郡ラムエウスキイオゴロドフ村出身。</u>カムチャツカ西海岸アストラハン漁場から露国義勇艦隊汽船「トヴェリ号」に漁夫として乗船。9月24日夜9時頃、泥酔して甲板タラップから中甲板に墜落し頭部を打つ。応急手当をするが死亡。水上署に届出たため、警察医が出張・検視、艦長に引渡した（『函館毎日新聞』1919. 9/26；『函館新聞』1919. 9/25；『函館日日新聞』1919. 9/25）。 ・9/26ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩と読経者イサーク増田。
13	セラフイマ・アレクサンドロヴナ・ユーロワ (37歳)	女	1922. 11/21	<ul style="list-style-type: none"> 函館病院で病死。11/22ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩。
※14	アナトリー・ヒチュエフ (1歳)	男	1922. 12/1	<ul style="list-style-type: none"> ・ウスリースクコサック将校アナトリー・ヤコウレヴィチの長男。函館港内に碇泊中の露国義勇艦隊「シーシャン号」にて病死。 ・感冒のため熊谷医師の治療を受けていたが死亡。白軍家族30名が特別に上陸を許可され、しめやかに会葬が行われた（『函館毎日新聞』1922. 12/3）。 ・12/2ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩。
※15	マリヤ・ペトロヴナ (2歳)	女	1924. 6/23	<ul style="list-style-type: none"> ・父はピョートル・ニコラエヴィチ・メドヴェージェフ、母はアナスタシア・ラリオヴォ。カムチャツカに向かう途中、「トムスク号」で函館港に入港。松風町の佐藤病院に入院、同病院で死亡。6/24

				ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者はイサーク増田（司祭は上京中で不在）。
※16	ワレンチナ（1歳）	女	1924. 7/13	・函館市蓬萊町島谷の雇人アレクサンドラ・ペトロヴナ・ボリソワ（オデッサ出身）の長女。急性腸カタルのため死亡。 ・7/14 ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩
※17	ポタフィフスキー	男	1925. 1/6	・露国義勇艦隊「インディギルカ号」船長。1月6日午後3時突然心臓麻痺で死亡、遺骸は当地にて土葬に附すと（『函館新聞』1925. 1/8）。
19	サーラ・グリゴリエワ	女	1928. 3/13	「連合国墓地調」には氏名と死亡日が記載されているが、メトリカには記載無し。
18	イワン・フョードロヴィチ・コビヤコフ（46歳）	男	1925. 10/22	・露国オホーツク出身か？ 函館市立病院に於いて胃癌のため永眠。最後の痛改および聖体機密の行為者は司祭モイセイ白岩。 10/25 教会墓地[にロシア人墓地のことか、正教会墓地のことかは不明（倉田）]埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩。
※20	デンナージ・ヨシポヴィチ・モルゲンコ（生後9か月）	男	1928. 6/18	父はストロゴノフ、母はアストラハン生のアンナ。1927年8月23日生。港内碇泊「広福丸」で肺炎のため死亡。6/19 ロシア人墓地に埋葬、葬儀執行者は司祭モイセイ白岩。

- ・メトリカの記載を転記した部分はイタリック体で記した。本表内の[]の部分は倉田加筆。
- ・「連合国人墓地調」とメトリカで没年が1年ずれている場合は、メトリカのデータに則った[表 No. 8、9、11]。
- ・埋葬地は、「旧墓地」、「露国人墓地」、「教会墓地」、「外人墓地」と様々だが、これらは全て「ロシア人墓地」を指すと考える。
- ・ユリウス暦（露暦）はグレゴリウス暦（西暦）よりも18世紀末は11日、19世紀は12日、20世紀は13日早い。ロシア革命後の1918年1月18日の法令により、1918年1月31日の翌日を2月14日とすることになった。
- ・新聞記事では「露国義勇艦隊」と記載されているが、この時期には「ソ連商船隊」と名称変更されていた。
- ・チャブ屋：外国船の船乗りを相手にした遊行場のことで、港町に存在した。
- ・水上署：函館水上警察署（西警察署の前身）のことで、函館港における内外船取締りのため設置されていた。

○明らかにになった点

- ・20名中、最も多い死因は病死（13件・65%）。肺炎、感冒、結核、胃癌と、感染症で亡くなる人が多かった。市内の病院に入院し、院内で亡くなった人もいた[No. 1、8、13、※15、18]。病死者の中には乳幼児や[No. ※14¹⁰、※15、※20]、函館に暮らす亡命者とおぼしきロシア人女性の幼子も含まれている[No. ※16]。
- ・事故死（3件・15%）では、海に転落・溺死、船上での転落死、上陸後の殺傷沙汰と様々だが、アルコール（ウオッカの類）による泥酔が事故の直接の引き金となっていた[No. 3、6、12]。

○墓碑が残っていない理由再考

- ・埋葬された時期が10月中旬以降、11月に多いのは、この時期カムチャツカ方面の漁場からの切り揚げ船が、漁獲物や生産物を函館で陸揚げするために寄港したためであろう。漁場での季節労働を終え、ウラジオストクに戻る途中函館に寄港したロシア人の中には家族を伴ってきた人もいたが、大半は単身での出稼ぎ者。そのため、葬儀や埋葬は遺族ではなく、基本的には雇用者（リユーリ商会やデンビー商会）が、場合によっては在函館ロシア・ソ連領事館が引き受けたと考えられる。埋葬時に木の十字架（墓標）が建てられたとしても、恒久的な墓（墓石）を建てるには費用も時間もかかる。雇用者はそこまでの面倒はみなかったのだろう。
- ・木柱は、海からの潮風を受け、冬には雪に埋もれ、5年から10年も経過すれば朽ち果ててしまうこともあれば、嵐や強風によって飛ばされることもあり得た。立ち入りが自由だった墓地の敷地内に入り、いたずら少年たちが木の十字架を引っこ抜いた可能性もあろう。

木柱が失われた理由は様々だろうが、墓を見守る遺族や近親者が近くにいないため、それに気付く者もなく、墓参に訪れる者もなく、やがて人々の記憶から消えていったものと考えるのが妥当であろう。

【参考文献】

- ・馬場脩は、大正4(1915)年10月6日に函館港で死亡（心臓麻痺）した露国義勇艦隊インディギルカ号船長タフィフスキーの名前を挙げ、墓跡が見つからないのは、木の墓標が朽ち果てたためと推測している（馬場脩『函館外人墓地』、79頁）。なお、当時の新聞記事から判断し、船長の名は「ポタフィフスキー」、死亡年は大正14年（1925）が正しいと思われる（表のNo. ※17参照）。

¹⁰ ※14が乗船していた「シーシャン号」の函館寄港に関しては、倉田有佳「函館における露国艦船1922年秋」『異郷に生きるII』成文社、2003年、187 - 199頁を参照されたい。

・プロテスタント墓地でも同様のことがあったことは、「5-6年前に」「プロテスタント墓地に埋葬されたインド船のセーラーを葬ったという一番新しい木の墓標はすでに朽ち果てて、文字さえ判読できなかつた。」、という記述からも明らかである（「百年のふるさと」⑤ 函館外人墓地『北海道新聞』1962年8月15日（夕刊）三面）。

・ハリストス正教会厨川神父は、当時の子供たちの悪ふざけで木柱が抜かれたことを指摘している（厨川勇「初代ロシア領事夫人の墓のなぞ」『地域史研究はこだて』20号（1994年）、106頁）。

・1975年以降に加わった墓碑3基

1989年に札幌で亡くなったロシア人信徒ニコライ・シャルフェエフ（Шалфеев）（1916.10.28～1989.4.13）とニコライの息子（1980年没）と思われる墓¹¹、ゴシケーヴィチ領事夫人エリザヴェータの墓¹²。

・「墓」と判明した1基

ロシア人墓地のほぼ中央のチャペルのような白い建物が、関係者への聞き取りにより「墓」であることが判明¹³。

2. ロシア人墓地に眠る人々

以下で[]内に示した数字およびアルファベットは、馬場脩『函館外人墓地』の「ロシア人墓地」見取り図で示されている墓碑番号。

■海軍関係者（幕末開港期 ロシア海軍の寄港地函館）

幕末開港期に艦船で寄港したロシア海軍関係者 25基。サンドウイッチ群島出身の捕鯨船水夫とされる 1基。

馬場脩『函館外人墓地』を基に倉田が作成。
死去した月日は露曆。

幕末開港期のロシア軍艦の入港数

1859	1860	1861	1862	1863	1864	1865	1866	1867	年
26	8	14	23	17	4	6	10	2	隻

（『函館市史 通説編』第二巻、函館市、1990年、163頁）

～ウラジオストク開基（1860年）前後の函館～

ロシアの沿海州から遠くない距離にある不凍港函館は、シベリア小艦隊の基地ニコラエフスクからウラジオストク、ポシエト、オリガなどの沿海州南部諸港間の海上交通を営むうえで、休養・載炭・食糧調達（新鮮な野菜・水・乾パンなど）、越冬に不可欠な寄港地とみなされていた。

・ウラジオストクの発展

1871年 極東のシベリア小艦隊の首港がニコラエフスクからウラジオストクに移る。
1875年 市制が敷かれる。
1890年にはウラジオストクは沿海州の州都に。

・ウラジオストクとの航路の開設：

1881年長崎、1889年神戸、1902年敦賀。

1859 (安政六)	6月26日 11月1日	アスコロド号 ジギット号	2 航海士 乗組機関兵	死亡 死亡	24号 21号
1860 (万延元)	1月25日	ヤボネツ号	1 乗組水兵	死亡	23号
1861 (文久元)	9月28日 10月15日 10月16日	ガイダマク号 ボサドニク号 ボサドニク号	4 乗組製帆夫 乗組兵曹長 乗組水兵	死亡 死亡 死亡	3号 7号 8号 18号
		サンドウイッチ群島生の元捕鯨船水兵・カトリック教徒		死亡	
1862 (文久二)	2月17日 3月9日 3月18日 3月18日 6月28日 6月30日 8月16日 8月27日 10月8日 11月19日	ボサドニク号 ボサドニク号 ボサドニク号 ボサドニク号 アブレク号 アブレク号 カレワリ号 ボサドニク号 ルインダ号 マンジュール号 アブレク号	1 I 乗組水兵 乗組水兵 水兵 少尉候補生 乗組水兵 乗組看護長	死亡 死亡 溺死 死亡 死亡 死亡 死亡 死亡 死亡 死亡 死亡	17号 16号 4号 5号 9号 6号 2号 14号 12号 11号 13号
1863 (文久三)	7月20日 8月6日 8月16日 10月27日	リュドウィク ルインダ号 ノヴィク号 ベルワヤ号	4 乗組四等船匠夫 乗組水兵 乗組水兵	溺死 死亡 死亡 死亡	1号 19号 20号 10号
1864 (元治元)	1月29日	ガイダマク号	1 乗組下士官	死亡	26号
1866 (慶応二)	6月5日 11月8日	アスコロド号 アムール艦隊沿岸砲艦 モリヤク号	2 水兵 乗組少尉	死亡 銃死	22号 25号
1869 (明治二)	8月27日	ボカティリ号	1 乗組水兵	死亡	15号

■土盛りの墓に墓石を置いたコステレフ大尉

領事館付武官パーヴェル・コステレフ海軍大尉（1833～1867年 Павел Михайлович Костерев (Косстеров)）

¹¹ 1989年に死亡したニコライ・シャルフェエフは、札幌には正教会専用の墓地がないため函館のロシア人墓地に土葬することになった（厨川勇「初代ロシア領事夫人の墓のなぞ」108頁）。ニコライの墓の墓碑には1919年10月28日に亡くなった妻の母アリアドナ・パヴロワ・シャルフェエワの銘もある。隣の八端十字架の墓は、墓碑に「アンドレイ・ニコラエヴィチ・シャルフェエフ（1952.3.31～1980.2.6）」と刻まれている。「ニコラエヴィチ」という父称から判断し、ニコライの息子の墓であろう（倉田）。

¹² エリザヴェータ夫人は1864年病死し、ゴシケーヴィチ領事がロシア領事館敷地内（現ハリストス正教会敷地内）に墓を作った。明治40年の大火（1907年）で木造の教会は焼失。数年後聖堂の建設工事中に敷地内から白骨と大人用の靴発見、ロシア人墓地（船見町）へ改葬された。領事の娘と考えられていたが、在札幌ロシア総領事の協力を得て領事夫人の遺骨と確定。墓碑がないため長らく埋葬場所は不明だったが、1990年に厨川神父が場所を特定、1993年5月厨川神父によって墓碑が作られ、成聖式が執り行われた（厨川勇「初代ロシア領事夫人の墓のなぞ」100 - 108頁参照）。

¹³ チャペルのような建物がドミートリ・シュウエツの墓であることを明らかにしたのは、ドミートリの息子フィリップの妻リュウバさんから聞き取り調査を行った函館市史編さん室勤務・来日ロシア人研究会会員だった清水恵さん（故人）。

は、ディアナ号大砲の弁天台場への設置、日本人への天文学、航海術、造船術、砲術、築城術の基礎を伝授、函館のロシア人墓地に埋葬されたロシア水兵たちの土盛りの墓に墓石を置くなどの功績を残した。1867年没。在函館ロシア領事館勤務期間は、1862年から1865年まで¹⁴、もしくは1866年まで¹⁵

■領事館関係者（幕末開港期 日本で唯一のロシアの外交代表部が置かれた函館）

現時点で確認できる領事館関係者の墓石は、前述のエリザヴェータ夫人の墓と合わせ計3基

・ヴラジーミル・ヴェストリ [27] 露暦 1869年1月1日没 享年 29歳
墓石に「在日ロシア帝国領事館医師」「この碑は彼の妻と友人等の熱心な尽力によって建てられたもの」、と刻まれている。「資料が残されていないため詳細は不明」と断りながらも、馬場はヴェストリを「ロシア病院医師」とみなしていると指摘（馬場脩『函館外人墓地』111、114頁）。だがヴェストリの所属先については再検討が必要¹⁶。

・ヴィッサリオン・サルトフ [28] 露暦 1874年1月17日（29日）没 享年 36歳
ロシア領事館付属聖堂の読経者兼鐘付。修道司祭ニコライが、キリスト教解禁前に3名の日本人（澤辺琢磨・仙台藩の酒井篤礼、南部藩の浦野大蔵）に洗礼を授けた時（慶応四年四月二日／1868年4月24日）の見張り役。

一旦はロシアに戻り、開拓使立函館学校魯語科教師¹⁷として再来日¹⁸。明治六（1873）年6月15日から12カ月間の契約だったが、1874年1月に急死。死因を究明するため開拓使が函館病院の外科医長として招へいしたアメリカ人医師エルドリッジが死体を解剖、日本人医師として深瀬洋春が立ち会う。死因は脳溢血と判明。遺品の引き取りをするなど後始末をしたのは、亡夫ピョートル・アレクセーエフから「ロシアホテル」の経営を引き継いだソフィアだった¹⁹。1974年9月にはサルトフ死後百年を記念する記憶祭（パニヒーダ）がロシア人墓地で行われた²⁰。

■白系ロシア人（1917年のロシア革命後に避難・亡命～函館に定着・没）

現時点で確認できる1917年のロシア革命後来函した白系ロシア人の墓石は、[A～G]の7基に前述のシェウエツの墓を加えた計8基。

<p>[A] <u>タニヤ・アリチ</u> 1914年5月6日～?年1月26日</p>	<p>大正初年に露国漁業家ダニッチの夫人となったアリチ（長崎生まれ。遺愛女学校出身）との間に生まれた娘（馬場脩『函館外人墓地』122頁）。「タニヤ」はタチアナの愛称ターニヤのことで、「ダニッチ」もしくは「ダニチ」の本名はウラジミル・ラクチン。デンビー商会支配人を長く務めた（倉田補足）。</p>
<p>[B] <u>バトーリン、</u> プロコーフィ・ペトロヴィチ： 1878 エラヴガ郡～1939年上海</p>	<p>エラヴガ郡（現タタールスタン共和国）出身。1918年春、北サハリンの鉱山や石油の採掘権を握る「スターヘエフ商会」の代表として日本に招へいされ、「露国経済界の巨頭」として大隈重信や久原房之助といった日本の政財界人から丁重にもてなされる。北サハリンの石油開発のために1919年に結成された「北辰会」と深く関わっていく。しかし、1931年9月フランスから再来日するが、この頃にはバトーリンに利を見出す日本人はいなくなっていた。1932年函館でアンナと結婚（再婚同士）。晩年の小西増太郎（トルストイと最初に会った日本人）と共にスターリン体制打倒を叫び、ドイツに向かおうと考え、まずはバトーリンが上海に赴くが、1939年8月2日、同地で急死。小西は、「新しきロシアの夢は破れた」、と落胆。上海の「アスター・ハウス」に宿泊中に心臓麻痺で死亡とされているが、スターリンによる暗殺説もあった模様。遺骸は上海に小西が引き取りに行った（倉田論考）。8月6日に火葬に付され、9月6日函館のロシア人墓地に埋葬（1939年9月5日『函館新聞』）。</p>
<p>[C] <u>リュドミーラ・チェリー</u> 夫人：1914年ウラジオストク 生、1939年上海没</p>	<p>バトーリンの函館での再婚相手アンナと前夫イワン・ゲオルギエヴィチ・デンビーとの間の子。1939年6月18日上海で銃殺され、7月8日遺骨は函館のロシア人墓地に埋葬。</p>

¹⁴ 沢田和彦『日露交流都市物語』成文社、2014年、64頁；Амир Хисамутдинов. Русские в Хакодате и на Хоккайдо, или заметки на полях. Владивосток, 2008. С.436.

¹⁵ 堀孝彦、谷澤尚一「堀達之助研究ノートー箱館（函館）時代（慶応元年～明治五年）その一」『名古屋学院大学論集（社会科学篇）』第24巻第4号（1988年（4月）、44 - 45（112 - 113頁））。

¹⁶ 函館に頻繁に寄港するロシア軍艦に乗船する海軍関係者の治療や保養のために建てられたロシア病院（二代目）は1866年4月23日に焼失し、露暦1866年5月16日には在箱館領事館付海軍士官の勤務が廃止された（ロシア連邦公文書局、ロシア国立海軍文書館、東京大学史料編纂所編『ロシア国立海軍文書館所蔵 日本関係史料解説目録』サンクトペテルブルグ・東京、2011年、281頁[500]）。函館のロシア病院が三度目の再建を果たした可能性は極めて薄い。

¹⁷ 1872年10月開拓使立函館学校に魯語科併設され、緒方城次郎ら日本人のみでスタートしたが、サルトフ着任（により函館学校は「露（魯）学校」と改められ（明治六年八月）、学校は一時勢いを取り戻した。馬場民則（民則の三男が馬場脩）はアナトリー司祭（1872年1月31日来函、1879年東京のロシア公使館付司祭に転任）に就き、またサルトフからは明治5年5月から同6年11月までロシア語を学んだ丸山浪人『北門名家誌 全』魁文舎、1894年、7頁。

¹⁸ 長縄光男『ニコライ堂遺聞』成文社、2007年、64 - 65頁。

¹⁹ 清水恵「函館のロシアホテル」『函館日ロ交流史研究会会報』No.28、10 - 18頁（典拠は「御雇魯学校教師サルトフ変死一件書類」函館市中央図書館蔵）。

²⁰ 『北海道新聞』1974年9月9日。

<p>【D】ズヴェーレフ、 クジマ・ロジーノヴィチ： 1886年ペルミ～1944年札幌</p>	<p>ロシア革命後、ペルミ（ロシア）からハルビン（1922年頃）へ避難～1925年9月来日。1929年室蘭で結婚し、1933年函館へ移住。喫茶「ボルガ」を経営、昭和9年（1934）の大火で被災。松風町に移り洋服小間物店「コジマ」を開店。北海道露国移住民協会代表。1943年、「レリメツシュ商会」関係外謀容疑事件で北海道の白系ロシア人7名が逮捕。洋服商ズヴェーレフはその一人（冤罪）。1944年1月7日、収監されていた札幌の刑務所で病死。ズヴェーレフ家の姉妹（2003年サンクトペテルブルグからガリーナさん、2007年キューバからオリガさん）が函館日ロ交流史研究会の招きで函館を再訪・墓参。</p>
<p>【E】アルハンゲリスキー、 ワシーリ・ワシーリエヴィチ： 1887年（墓碑には1886年）ア ストラハン～1939年函館</p>	<p>オホーツク・カムチャツカ方面で漁業監督官（国有財産庁官吏）を務めていたが、革命政権下で失職。職を求めて妻子を伴い来函。函館で漁業会社を興すも失敗。日本の新聞を要約した露字新聞『ルースキー プレッシ』を発行。1933年に日魯漁業株式会社長平塚常次郎の好意で同社外事課に入社。北洋同志会主催の露語講習会講師を亡くなる直前まで7年間務めた。1939年病没。妻クセニア・ニコラエヴナ（1881年～1943.1.8没）【F】、娘クセニア（1921年～1943.1.12没）【G】もロシア人墓地に眠る。</p>
<p>シュウエツ、 ドミートリ・ニコラエヴィッ チ： 1884年9月18日ウクライナ～ 1934年</p>	<p>シュウエツ家は北サハリンのアレクサンドロフスクで商店を経営、日本軍の北樺太占領期間が終了する直前に函館へ避難（1925年4月）。ハルビンに転居するが、1928年（もしくは1929年）に函館へ再移住。毛皮・洋酒・砂糖などの取引などで成功を収め、1930年には5,000円で豪邸を建てた。出張帰りの列車内で事故死。1936年シュウエツ一家は函館を離れ、翌年レイモンがこの家を獲得（ハム・ソーセージで有名な「カール・レイモンの旧居宅」）。</p>

【参考文献】

- ・【B】：倉田有佳「函館に眠るP.P.バトーリン」『函館日ロ交流史研究会会報』No.41（2020年）、21-23頁；エドワード・パールィシェフ「革命・内戦期の北サハリンとイヴァン・スタヘーエフ商会の活動」『日本帝国の膨張と縮小—シベリア出兵とサハリン・樺太』北海道大学出版会、2023年、87-120頁。
- ・【B】と【C】：岡田一彦「描かれたデンビー一族—幻の北洋の覇者—」『市立函館博物館紀要』第3号（1993年）、1-32頁。
- ・【D】：小山内道子「ガリーナ・アセエヴァの歩んだ遠い道のりをたどって」『函館とロシアの交流』函館日ロ交流史研究会創立10周年記念』函館日ロ交流史研究会編・発行、2004年、30-41頁。
- ・【E】：「ワシーリ・ワシーリエヴィチ・アルハンゲリスキー氏の急逝を惜しみ、その精勤と学殖とを景仰す。」『北洋』第10号（1939年）、北洋同志会、89-90頁；日魯漁業株式会社取締役社長平塚常次郎「会員への弔辞」『北洋』第11号（1940年）、北洋同志会、100頁。
- ・シュウエツ：清水恵「サハリンから日本への亡命者—シュウエツ家を中心に—」『異郷に生きる—来日ロシア人の足跡』成文社、2001年、77-87頁。

■非ロシア人の墓碑（ポーランド人の墓）

ポーランド政府の事業として日本全国で実施された調査の一環として、2009年にポーランド大使館員、ポーランド人と日本人の研究者がポーランド人の墓碑調査のため函館を訪問。埋葬者の名前からポーランド人の可能性の高い墓が4基あると結論付けた（最古の墓・安政6（1859）年6月に亡くなったアスコリド号の水兵**ポウルケヴィチ**〔24〕、リュドヴィク・**シャチコフスキー**〔1〕、カジミール・**ネボゴダ**〔20〕、医師**ヴェストリ**〔27〕）²¹。

■非ロシア人の墓碑（エストニア人の墓）

2024年4月エストニアのタルトゥ大学Ene Selart（エネ・セラルト）教授が、1866年6月5日没「アスコリド号」水兵**Матис Векман**（マチス・**ヴェクマン**）の墓〔22〕の調査のため来函。「姓名だけで彼をエストニア人とは断定できない。バルト・ドイツ人の可能性もある。だが、ロシア帝国時代の海軍将校は貴族階級のバルト・ドイツ人が占め、水兵はエストニア人が多かったことから、水兵だったヴェクマンがエストニア人である可能性は高い」（セラルト教授の談）。

■明治初年に亡くなった日本人信徒の墓

〔a～h〕の**8基**。明治8（1875）年1月23日に14歳で死去した正教会伝道者**アレクセイ**山中友伯の長女**ウエラ**の墓が第一号（馬場脩『函館外人墓地』127頁）。

・まとめ

函館のロシア人墓地に眠る人々は、幕末開港期の海軍関係者、幕末開港期から明治初年の領事館関係者、1917年のロシア革命後の白系ロシア人、そして明治初年の日本人信徒に大別されてきたが、21世紀に入り、ロシア帝国の版図に含まれていたポーランドやエストニアの研究者による自国人の墓碑調査から、「ロシア人（ロシア帝国臣民）」と一括りにされてきた埋葬者に非ロシア人が含まれていることを意識させられるようになった。

2026年3月現在確認できる墓石数は47基（43+3+1）、墓碑が失われたと思われる埋葬者は20名。なお、独立した墓碑はないものの、1989年にニコライ・シャルフェエフが埋葬された際に合葬されたと思われるニコライの妻の母**アリアドナ・パヴロワ・シャルフェエワ**（ニコライの墓の銘板によると1919年10月28日没。没地は明記されておらず）の遺骨も「墓地に眠る埋葬者」の数に加えるべきかもしれない。

²¹ 調査結果は、エヴァ・パワシュニルトコフスカヤ（代表）・稲葉千晴編集『日本におけるポーランド人墓碑の探索』（ポーランド文化・民族遺産省文化遺産局、ワルシャワ、2010年）を参照されたい。



～海軍関係者の墓～

墓地の真ん中の通路を挟み、入口から向かって右手横二列に同じようなかまぼこ型の墓石が整然と並ぶ。1人当たりの墓面積は半坪・約1.6平米（「連合国人墓地調」）。大きな石の墓は、溺死した息子の死を悼んだ母親がウラジオストクから巨大な自然石を運んで来て造ったという息子アンドレイ・ポポフ海軍少尉とその同僚の水兵の墓。



～領事館関係者の墓～

右端からエリザヴェータ夫人・ヴェストリ医師[27]・サルトフ[28]

～白系ロシア人の墓～

入口から右手に7基。1934年から1944年にかけて亡くなった人たち。墓碑の形状は、かまぼこ型[D・E・F・G]・八端十字架[B・C]・ドーム状の建造物と様々。



通路中央の突端に立つ
十字架の裏面の碑文

「モスクワ及び全ロシアの総主教
キリル聖下函館訪問の際成聖された

2012年9月14日」

市立函館博物館蔵 アルバムより：

右端バトーリン[B]、真中が妻のアンナ（1898年サマーラ生。娘時代の姓はクルプスカヤ。函館では「ニーナさん」の名で通っていた。コンスタンチン・プレーゾと再婚し（三度目の結婚）、1988年に亡くなると軽井沢に埋葬されたが、横浜外国人墓地にあるデンビー家の墓に改葬。左端の女性はリュドミーラ[C]か？



参考：ユジノサハリンスク市郊外の墓地（2014年 倉田撮影）